

—— 同朋会運動を生きてきた北海道教区の人たち ——

第3回 浅野 俊道 氏 (第5組樹教寺住職)



—— 教化本部としては、教区教化が一人一人の学びとなり、そして一ヶ寺の力になっていくことを願って活動させていただいています。これからの教区における教化活動を模索する上で、「同朋会運動を生きてきた北海道教区の人たち」というタイトルのもと、3名の方に取材をさせていただいております。私たちの世代は、生まれた時にはすでに同朋会運動が始まっており、お寺に戻ってきたときには特別、同朋会運動という意識もなければ、それが当たり前でした。浅野さんは、変革の真ただ中、その時代歩んでこられたと思います。そのような中であってその頃の、人を動かしていったような熱意、熱はいったい何だったのかを率直に語っていただければありがたいと思います。

どこまでも自分の体験でしかものは言えないから、自分の経験を思い起こして、記憶にあるような事は語ってみたいと思うけど。

—— 浅野さんは宗務役員、そして教務所長、一ヶ寺の住職として同朋会運動に関わってこられたと思うんですけど、宗務役員になられたきっかけは？

私が真宗同朋会運動(以下、同朋会運動)に関わって来たなどということは、まことにおこがましいことだと思うけれど。まあ少しはその経緯も語ろうと思う。私はもともと宗務役員を志望してなったのではないの。ざっくりばらんに言うと、私は田舎の寺に生まれて、京都の大谷大学に7年間在籍し、自坊に戻ったのが昭和46年の年でした。しかし、それ以前の昭和43年、当時教務所に旭祐栄次長さんという方がおってね。その旭さんから、「私に時間もあるみたいだし京都で一週間ほど勉強してこないか。旅費も出してやるし、宿泊

費も出してやる」と言われて、嬉しくなって初めて本山で行われる「青少年教化課程研究集会」に参加したのが教務所に入出入りするきっかけになった。まあそれは、後々の話とつながっていくことだけでも。また、昭和49年10月発行の北海道教区で作った「北海道開教百年史」があるでしょ。富良野の法栄寺多屋弘さんが編集代表者となって、とても厚い本。その出版の編集作業を旭祐栄次長さんから手伝えといわれてね。本の裏にスタッフの名前も載っているけど。私は先輩と一緒に泊まりがけで、編集の小間使いのような仕事をした。そんなことで教務所にちょくちょく出入りするようになったのです。

そうこうしているうちに昭和48年、「北海道教学研究所」が発足し、その第1期研究員に任命され、仲野良俊先生に指導を受け、私にとっては大学とはちがいとでも有難い学習の場だった。仲野先生からは厳しく叱られたこと、また可愛がってもらったこと、全てが今の自分の礎になっているような気がする。それから1年くらいたって、途中から教研の主事の仕事を仰せつかったのです。その頃僕は地元の農業高校で非常勤講師をやっていて、自坊と教務所を行ったり来たり本当に忙しかった。そうこうしているうちに、当時教区青少年指導主任をしていられた第16組浄慶寺の中根慶邦さんが退任されるということになり、最初は非常勤でもいいから教研と青少年指導主任の仕事を兼務してもらえないかということであったのです。

しかしそのうち「教区青少年研修センター」の管理業務もということになり、いよいよどっちつかずの仕事になってはいけないと思い、それで昭和50年の年、本山宗務役員として常勤で勤めることになったのです。最初2・3年、お手伝いのつもりで勤めるかという話しが、だんだん勤務が延びてしまい、青少年指導主任の後は教区駐在教導、さらに今度は本山組織部付け出仕ということに教務所の次長の仕事をもすることになったの。組織部と書いてあるので、ある人が京都に行くんだってと言われて、お餞別を持ってきてくれたのだよ。「いや行かないよ」と言ったら、その半年後の昭和59年春、京都本山教育部に転勤することになって、自分でも全く予期しない生活を送ることになったのです。約3年半京都での宗務所生活を送り、そして辞めて自坊に帰ってきたのです。それから2年位して、平成2年にまた、北海道教務所へ再勤務ということになり、4年ほど勤めました。なんせトータルすると19年ほど宗務役員の仕事をした計算になる。まあそんなことでいろんなことやってきました。思い起こすと大変だったけど、得難い経験と勉強をさせてもらったなどありがたく思っている。何らかの形で縁がなければ経験したくても出来んのだから。

—— それは昭和何年くらいなの？

色々自分の宗務歴を語ったけど。先ほども言ったように、自坊に帰ってきたのは昭和46年の年。当時宗門の中身のことはまったく分からなかったよね。ただ、本山で昭和48年に親鸞聖人の「御誕生800年」の慶讃法要があったの。後で色々それにまつわる話になるけど。昭和44年、知っての通り宗門に「開申事件」という教団問題が起きるわけ。

それで当時、宗議会で野党だった議員会派が内局を構成し、与党の直道会が推し進める同朋会運動は頓挫することになる。これをきっかけに大騒動になるわけ。昭和44年から約5年間、昭和49年までの間、混乱の時代を迎えるわけだよね。で、5年間に総長が5人変わるのだよ。まあ、日本の総理大臣みたいなものだ。次々次々と総長が変わっていく。誕生法要が終わって、それまで宗門の混乱がずっと続くのだけれども、昭和49年の年に嶺藤亮という方が宗務総長に推挙されることになる。色々困難の中で、直道会に所属しておる会派からの総長が選ばれ、宗門正常化に向けての動きになるのだけれどね。だからその誕生法要のときは、まあ非常に混沌としている時代だったね。

ただ、法要に向けていろいろな記念事業や行事があって、その一つに本山の青少年部が企画した「東本願寺青年の船」というのがあって、是非それに参加してみようと。こっちはもう、海外行ける喜びで。当時は誕生の記念事業として、特に寺族の青少年にこれからの将来担ってもらおうという願いがあったようだけれど。こっちは、今だかつて船に乗って海外へ行った経験もないし、これはいい機会だと思って応募したのですよ。北海道から私と第6組光明寺の相河孔明さん。その時の写真、今でもいっぱいあるけれど。青年の船の航路は、横浜から船に乗って台湾を経由して、香港までを船で。アメリカの客船で、今でも船の名前覚えている。確か「プレジデントクリーヴランド号」と言ったと思う。これはアメリカのロサンゼルスからハワイのホノルルを経由して横浜へ。それから台湾、香港、インドネシアへの定期航路でなかったかと思う。そういうルートに便乗する形での船旅だった。青年の船のメンバーは何人おったかな。全部で50人余だったのでないかな。その参加メンバーには、後々同じ宗務の仕事をした仲間がおり、現在、宗務総長をしている里雄康意氏もその一人。彼とは同室だったこともあるね。また、以前に北海道の教務所長しておった越岡耀瑞氏や、それから小林潤一氏、みんなそういう意味で、この旅行は有り難い御縁だったのではないだろうか。

最初、横浜から乗船し、台湾の基隆という港へ寄って、そして香港へ。で、帰りは香港から飛行機で沖縄、そして羽田へと戻ってくるコースだった。行ったときは丁度、沖縄は日本に返還される直前の年（昭和47年5月）で、まだアメリカの領土だった。何かものものしい雰囲気だったことを覚えている。

ところで、この青年の船を実施するに当たっては一つのテーマがあり、それは「海に学ぶ」でした。その時の講師が大谷大学教授の伊東慧明先生、もう一人は中外日報の編集長、唐川越雄先生でした。当時中外日報と言うと、宗教新聞としては非常に高く評価されていた新聞でした。そのお二人が講師で船上研修が行われたのです。

これは伊東先生の講義ですが、宗祖親鸞聖人が浄土真宗の教えを明らかにする中で、「海」という言葉を非常に多く用いられている。「機」の立場、「法」の立場。人間を譬えるにも海。法を譬えるのにも海。たとえば人間であれば「群生海」とか「煩惱海」とか、「衆生海」というように。法の世界では「本願海」とか、「光明海」とか、「一乗海」とか言うように、全部海で譬えられている。そもそも海がもっている言葉の意味は広くて、深いということ、

すなわち人間存在も法の存在も人間の知性や理性では包みきれないことを、海が象徴的に表現している。そういうことがあって「海に学ぶ」というテーマが掲げられた。今思えば、私の青春時代のかけがえのない体験だったように思う。

—— 同朋会運動との関わりが？

同朋会運動は昭和36年、「宗祖親鸞聖人700回御遠忌法要」厳修の後、翌37年に宗議会で同朋会条例が通って、それから行政上に乗せた運動だね。まあある意味では行政指導型の運動形態。下から盛り上がった運動じゃなくて、本山が運動を企画し、門末がその呼びかけに応じる形で始まった。またそうでないとも出来なかつただろうと思う。

だけどそこに、この同朋会運動の突破口になっているのは、何も昭和37年から始まったわけではなくて、ずっと脈々とやっぱり人の伝統があるのだよね。我々が宗祖親鸞聖人と言っておるけども、本当に宗祖と言われる親鸞聖人と向き合い、その教えを我が身にいただいてきたのだろうか。そういう真摯な問いをずっと持ち続けてきた人がいたということである。果たして自分は、教えの前に真剣にそのことを訊ねたことがあつただろうか。宗門はそういう名もない人の、そういう歴史を背負ってきたと思うのだ。そういうことが具体的に実践的な信仰運動となって同朋会運動が始まったのだと思う。

同朋会運動のその基となるのは「同朋生活運動」といって、昭和24年、「蓮如上人450回御遠忌法要」を勤めるにあたって、非常に困窮した戦後の間もない中、当時、宗務総長された暁鳥敏さんによって提唱された運動である。暁鳥さんの自坊は金沢の明達寺、すでに宗門の中で名声を博していた方である。このような時代状況の中、この人になんとか宗門を担ってもらおうということで、本山の議会に於いて議席のない宗務総長を選んだのである。その職に就いたのは、わずか一年だったけれども、とても大きな仕事をなされた。暁鳥さんのことについては、知っていると思うけれども、北海道にも住んでいた林暁宇さんが色々と本に書いてられる。「三味線婆ちゃん」や「念仏総長 暁鳥敏」等。林さんはもう亡くなられたけれども、生前、私のお寺にも来ていただき、お話をしていただいたことがある。その際にも自分は暁鳥さんとの出遇いがなかったら、今の自分はいなかった事を述懐しておられた。暁鳥さんの門下生は、みんな「暁」という字が付くのだよね。私の知っている人では児玉暁洋先生とか、出雲路暁寂先生とか、その他にもいっぱいおられる。みんな暁鳥さんとの御縁をいただいた方。それぞれ名前に暁の一字を法名としていただかれたのかなと思ったりもする。児玉先生は大谷専修学院の指導や本山教学研究部所長をされ、北海道教区で行われた伝道講究所にも何年間か来ていただいたことがある。また、出雲路先生は大谷派の御住職であつて、金沢大学の先生をしておられた。以前、聞いたことがあるけれど、金沢大学には暁鳥さんの蔵書の寄付を受けて「暁鳥文庫」というのがあると。そういうこともあつて、金沢大学では暁鳥さんの影響を受けられた方も沢山おられたのではないと思う。出雲路先生も金沢大学の先生として教鞭をとつておられた。しかし、

出雲路先生は残念ながら50代で亡くなられたんでなかったかな。私は教区駐在をしていた頃、研修会に出講してもらったり、「東本願寺公開講座」にも出てもらったりしたこともある。又、先生の講演録も作った。こうした先生方のお話を聞いても、暁烏さんの影響はとても大きいものがある。

暁烏さんは宗務総長になられて、全国の門末に「宗門各位に告ぐ」という文章を出しておられる。その要点は「真宗」の昭和56年6月号に「同朋会運動の源流をたずねて」という題で、元本山研修部長された柘植闡英先生が3回にわたって書いておられる。この中に暁烏さんのことを色々仰っている。昭和37年、同朋会運動を提唱した時の宣言文、そこには「人類に捧げる教団」という言葉が出てくるけれど、その精神はすでに暁烏さんが仰っている。それは次のように

「宗門改革の目安を、宗祖七百回忌執行におき、十年計画を以て教学も財務も、すべてこの線にそって大々的の計画を建てたい。」

「聖人の法事をするには、聖人の最もお好きな事をしなければならない。これまでは宗門では一万の僧侶、百万の門徒というて来たが、私は十方衆生というてある如来の本願にたより、世界二十億の人を念仏の道に引き入れ、浄土に往生せしめることが聖人の何よりのお好きなことと思う。」

「宗門の現状を見ると、教学は振るわず、財政は紊乱し、宗門の内外から危機と言われておる。而し財政紊乱の事など大したことではない。宗門護持のためには、財力を要することは申すまでもないが、財は正信念仏の心から湧き出てくると、信じているからである。」

「一も信心。二も信心。三も信心。どこまでも、信心為本の骨折りによって、すべて解決されてゆくものと信じている。」

「七百回を迎えるまでに、聖人の著書を少なくとも、英語、ドイツ語、フランス語、ソ連語、スペイン語、中国語、インド語に翻訳せねばならない。その訳書を携えて、おのおのその国に行き、その国に骨を埋むる覚悟で伝道する人を、養わなければなりません。」

まだ他にも述べておられるが、要は、昭和36年の700回御遠忌法要を迎えるに当たり、10年後を見据えて、暁烏敏総長は色々考えておったのだと思う。

「如来の本願」の教えというのは日本人に留まる、そんな話しじゃない。民族を越え、国を超えて世界人類の救いを訴えかけておるのだと。まあそういうお気持ちだな。暁烏さ

んはそういう心で仏法を語っておられたのだと思う。

また、財のことを取り上げているけれど、お金のないことなど大した問題でない。財は正信念仏の心から沸き出てくるのだと。こういうこと仰っておられる。この発想だね。我々はお金がなかったらなんにも出来んというのが先に来るけど。「正信念仏」、ほんものの事に会えば、ちゃんとそこに財は付いてくる。そういう世界をいただくのだと。仏法というのは、ある意味では深い自信なんだよね。目先のことで右往左往せんでもいいということなのだろうな。

しかし、宗門は当時本当にお金がなかったようだよ。以前、北海道教務所長をした日野賢憬さんが、私たち所員に言っていたことがある。自分がまだ若い本山職員だった時、暁鳥さんから「君達、自坊に帰ったら、親に少しでも本山のためにお金を出してもらうように」と言われたとか。職員に浄財を集めさせたというのだよね。まあ、今言ったらえらいことになるだろうけどな。だから職員の給料もろくにあたらん時もあったようだ。また、そういうことが暁鳥さんの口からは言えたのだろうな。それだけの自信があったのだと思う。実際に会ってないので分からないけれど、想像すると、そうやね。

ところで、本山の御影堂で晨朝法話が始まったのも暁鳥宗務総長の時からだと聞いている。それまで晨朝法話なんてなかったようだ。暁鳥さんは、本山での総長の仕事は晨朝でお話しすることだと肝に銘じていたのかもしれない。他は何も出来ん、計算も何一つ出来んと。出来ないけどこのこと一つだけは自分の仕事だと。まあ、やっぱりそういう世界に生きておられたのだろうな。

暁鳥さんは、親鸞聖人の教えの要は「信心」ということだと。教えの道筋を信心というところにおいておられる。『歎異抄』には

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとしるべし」と。

また、蓮如上人の『御文』の中にも、

「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもって本とせられ候う」と。

親鸞聖人の教えの根幹をなすものは信心なのだ、そこに教えの伝統があるのだと。暁鳥さんの仰ることには、一本筋の通ったものがあったのだと思う。言葉のなかに人々は新鮮な驚きがあったのではないか。我々は何でも常識の世界で生きとるけども。仲野良俊先生はよく言っておられた、浄土真宗の教えは常識を超える。非常識ではないけれど超常識なのだ。常識を超えるという世界をいただく。後の同朋会運動に生きた人々はやっぱりそういうものに触れたのだろうね。そういう驚いた人の言葉に動かされたのだと思うね。ま

あ「一にも、二にも、三にも信心」ということが親鸞聖人の教えだと。では、具体的に我々の果たす務めは何だということになる。

同朋会運動を進める中で寺族の者を育成員と称してきたけど。お寺さんは何のためにお寺に住んでいるのだと。こういうことだね。そういうことが疑問にもならないほど安逸を貪っているのではないか。ずっとそういう問題があるのだと思う。今でもお寺の生活にあって、何もしなかったら何もしないで終わって行くのだよ。人間、なんていうかな、それこそ衣食住の満足だけを求めての生活、食べること、着ること、住むことだけを繰り返しての生活。でも、人間は本当の意味で、そんなところに安住は出来ないというものを抱えている。心のどこかに突き上げてくるものを感じる。

そういう問題の中に信心の課題があるのである。また、そういう課題と向き合った運動が同朋会運動ではないのか。そもそも同朋会運動の背景には、先ほども言ったけど、暁烏さんの同朋生活運動というものがあったということだね。当時、暁烏さんが全国の門徒に呼びかけたのは、「みんな米を持って本山のお堂を掃除しに来てくれ」と。恐らく当時、京都の駅前には煙をはいた列車で汚かったのだと思う。そういう中であって、まずお寺という場所はいつも清楚でなければならない。それは我々でもそう思うものね。京都は観光寺院が多いということもあるけど、しかし、何処のお寺へ行ってもきれいだよね。お寺でなくたって、よく言われるけど、家の玄関に入ったらその家の生活の雰囲気があると。やっぱり具体的なことでいうと、そういうことだよ。日頃、周りのことを思いやる心が養われているかどうかということに、生活という意味があるのではないのだろうか。暁烏さんが提唱した同朋生活運動はそういうことでなかったのかな。生活運動だから生活を離れて仏法はない。生活という問題と仏法は一つのことだと。そういうことをいつも語っておられたのだと思うね。

で、それをさらに推し進めていけば、暁烏さんの触れた世界があるわけだよ。それはやはり、明治期における清澤満之先生との出遇いだと思う。当時、青年数名と清澤先生に直接教を請い、「浩々洞」という場所で共同生活をなされた。正に自ら念仏生活を体現なされた方なのである。ある意味で清澤先生がこの大谷派の宗門におられなかったら、私は恐らく教学、教化の面で宗門も今とは全然違ったものになっていたのではないかと思う。まあ、それはあくまでも想像だけだね。宗門人の身びいきかもしれないけど、大谷派に流れる教学の根底には清澤先生が自らを問われた「自己とはなんぞや、これ人生の根本問題なり」ということが脈々と伝えられて来たように感じる。その意味で、この同朋会運動はそういう伝統の中から生まれたと言えるのではないだろうか。清澤先生のしからしむところ誠に大きいものがあると思う。このことは、先の吉田法純さんのインタビュー記事の中でも仰っているね。

昭和37年に同朋会条例が公布されて、同朋会運動第1次五ヶ年計画の「特別伝道」、「本廟奉仕団」、「推進員教習」という三本柱が行政施策として打ち出される。そして昭和42年に第2次五ヶ年計画が発表になって、全国教務所にそれぞれ行政の中に「教区教化委員

会」というものが設置されることになる。だからこの五ヶ年計画は、さらに運動を展開する具体的なことがでてくるわけ。

これはいろいろ後から分かったことだけれども、教団問題と絡んで、同朋会運動が停滞していったという状況の中、まだ教学研究所は宗門の若手育成員の学習の場を開いていかなければならないという使命をもっていたのではないだろうか。

さっきの話しに戻るけど、昭和43年に本山で「青少年教化課程研究集会」が開かれ、それに参加したことが僕にとってとても有難い研修会だった。その時の講師は教学研究所の所長、蓬茨祖運先生がつとめられ、我々五日間、南加賀詰所というところで合宿生活を送ったのです。参加者は全国から40人位いたと思う。これは当時本山教研の先生方中心に、この運動計画の中に「真宗カリキュラム」という事を取り入れようと考えていた。この研修会はその試みとして開かれたことを後で知ったのである。それはなぜかということ、今ひとつ分からなかったのだけれど。その時の研修会の講義録がこれだね。「真宗の学習」という本。もう、これは絶版になっているからおそらく手に入らんとと思うけど。もう一つ「釈尊伝」というものもある。これも絶版になっていると思うな。とってもいい講義録だよな。

これはやはり運動の裏付けがあるわけだよな。それまでは、教化ということがどういうことをもって教化と言ってきたかということ、やっぱりお説教だね。布教使さんがおって、御門徒の前で布教する。それが普通、当時の教化ということだった。まあもつといえば、説教者をたくさん養成するっていう、そういう考え方があったのだろうね。

当時、布教団というのがあちこちにあったようだ。よく聞いた名前に能登布教団というのがあった。今はどうなっているのかね。能登地方は大谷派の寺院がたくさんあるところで、寺院の大きさも大坊、中坊、小坊というか、だから大きなお寺は何千も門徒があり、門徒の中には自分の寺の住職をまだ見たことがないということもあるそうだ。まあ、言葉は悪いけれど、寺と寺の関係が徳川幕藩体制をそのまま引きずっているような所があるということかな。だから小さいお寺は門徒が少ないわけだから、みんな何で生活を立てるかということ、布教師になって説教をする。そういう寺院形態だね。まあしかし、それが宗門の教化といわれるものを支えてきたという一面もあるんでないかな。果たして教化とは何か。そこに、それまで学習なんていう言葉を余り使っていなかったと思うけど、教化と学習は不離一体のものだと。要はお坊さんも学習をしなきゃならん。まあもつという、坊さんは勉強しないで坊さんとはいえないのだと。それがやっぱりすごく、当時刺激を受けたことだね。坊さんが坊さんのつとめを果たすには勉強をしなければならんと。勉強という中身は、世間でいう勉強とはまた違うということを蓬茨先生からおそわった。それはもう蓮如上人の『御文』や『御一代記聞書』を読めば解る。お聖教を読むということについて、厳しい言葉で蓮如上人は仰っている。

「さらにわが身の一心をも決定する分もしかしかともなく、また一卷の聖教をまなこ

にあててみることもなく、一句の法門をいいて門徒を勸化する義もなし。ただ朝夕は、ひまをねらいて、まくらをともとしてねぶりふせらんこと、まことにもってあさましき次第にあらずや。しづかに思案をめぐらすべきものなり」

『御文2帖目12通』

「聖教よみの聖教よまずあり。聖教よまずの聖教よみあり。一文字もしらぬとも、人に聖教をよませ、聴聞させて、信をとらすは、聖教よまずの聖教よみなり。聖教をばよめども、真実によみもせず、法義もなきは、聖教よみの聖教よまずなり」

『蓮如上人御一代記聞書』

要は、お聖教というものを大事にしているのかということだろうな。一卷のお聖教も読まないで我々は、果たして本当に仏法を語っている事になるのか。耳の痛い言葉だね。でも、そういうことの元を辿っていけば、全部蓮如上人や宗祖親鸞聖人の教えに繋がっていく。そういう流れを受けて同朋会運動というのは起こって来たのだと思うね。

やっぱり、事の本質は宗祖の教えというものだろうと思う。ずっと伝統された中に、人間をどういただくのか。我々はどういう一生を果たすのかという問題と常に一つのこととして。親鸞聖人の御一生はどこまでもお一人お一人の人間の存在を尊重しあうというかな。それはもう「同朋」という言葉そのものが表わしている意味だと思う。同朋会運動の同朋という言葉は、あえてそこに意味を持たして提唱したというのは、そういうことだろうね。御同朋御同行と、いつも親鸞聖人が仰っておられたという、その心を忘れないことがやっぱりあったと思うね。だから同朋会運動は、何か会を作る運動でなくて、一人ひとりが同朋であることの自覚運動と言えるのではないか。同朋会の会というものが付いたからちょっとややこしいけどね。

暁鳥さんは同朋生活運動って仰ったけれど、同朋ということの目覚めだと思うのだよね。運動の中身は一人ひとりが同朋であることの目覚め。だからそこにいろんな人間の問題として起きてくる中身は全部、同朋であることを忘れて、世間の価値観だけで生きるという事があるのだろうな。だからそういう人間の自我の心から開放するという運動として同朋会運動は始まった。同朋であるということをいかに自覚せしめるか。まあ、言葉では言えるけどな。なかなかそのような心は聞かしてもらわなければわからん。教えていただかなければわからんということだろう。

まあそれはそれとして、「真宗の学習」の中で語られることは学習という事。まあここからだね。聞法、学習という言葉が生まれてくるのは。もともと聞法という事は言われるけれど、我々の学びというのはもちろん聞くということ前提にして、学ぶという学習。それと同時に、そこには伝達ということも含まれてくる。「聞法・学習・伝達」という、この3つのことだろうね。伝達ということは、研修会でお話しするとか、法座でお話しするとか、これは伝達だよ。だからこの聞法・学習・伝達が循環運動のように、日常の我々の勤めとして大事なことになってくる。ここに蓬茨先生は学習の中身というものを、はじめて教

化というものと教育ということを書いておられる。学習というのは教育。やっぱりそこに教育。学ぶということの中に一つ一つの深さを聞きとっていくってということかな。

だから同じその学び、教育というものの中に、蓬茨先生は2つあげているのだ。「解学」と「行学」といってね。まあ聞いたことあると思うけどね。真宗の教育は行学であると。いわば人間の知性の、単に知識の学びでなくて、自己自身の真の救済を求めるために学ぶ。それを行学と仰る。だから仏教というものは、仏教学。学問としては深いものがあるけれども、どれだけ聖典学習をしたとしても、それが単なる知的関心でとどまるのであれば、仏教というものが自分の中に生きた教えとしてはたらないということだよ。知的関心だけでは、研究材料にはなるかもしれないけれども、自分の救済とは無関係。そこに、この仏教の学びとはいかなるものかと、蓬茨先生は仰る。だからといって解学ということが無用と言うことではない。やはり知識がなければ学べないということもある。知的関心があるということも大事なことから。ただ、そこから新たな学びが深まっていくかどうか。

それは我々も大学時代、そうだったな。知的関心というか、いやいやでも単位とるために勉強をしなければならなかったからな。だからといって無駄ではなかったと思う。無駄ではないけど、もう時間が経てば、そんなこと教えてもらったかというようなものだよね。行学というのは、生活と離れんという所に、いつも学びに帰っていくようなものになっていく。生活の中で、あの先生の言葉はこういうことだったのか、とか。あの時の先生の言葉が、本当に何か響いて感じられるとか。そういう体験が仏教、教えの言葉となって自分に活きるということ。そのことを学習するという。そのためには教育課程というものが一つなきゃならん。だからカリキュラムが必要だと。これは当時の本山教学研究所では、同朋会運動の一つの柱に据えて行こうと考えておったのではないだろうか。それは後になって、そういうことだったのかと分かったことだけれど。参加した時は何のことだか。それも知的関心で行ったわけだから。でも、ああそうかと。やっぱりこういう一つの運動の中で、願いを具現化していくためにはカリキュラムがいるのだということも教えてもらった。

で、こういう行学のことも、元をただせば善導大師が『観経疏』の中に仰っておられる。自分というものを明らかにしていく道というものがないと、人間本当の意味の満足は生まれ来ない。善導大師は常に、そこに身を置いておられた。やっぱり、そこに善導大師自身の一生の生き方を仏教に学んでいかれたのだと思う。そういうことがあって、後でいろいろと自分の辿った経験が有難かったなと思っている。

—— 北海道における育成員教化は、どのような方向性のもとに施策がとられていったのでしょうか。

昭和47年、北海道教区に若い青年僧侶の学習の場を開いていこうというのがあって。それで第1回伝道講究院というのが開かれたのです。これが、後に伝道講究所と名前を変えて受け継がれて行きますが。これが記憶にある我々世代、最初の育成員学習の場でなか

ったかと思う。私はこの「第1回伝道講究院」に参加したのです。講師は先ほどお話しした蓬茨祖運先生でした。当時、藻岩山にある北海御廟の古い本堂で、確か5日間だったと思うけれど、合宿形式の研修会でした。非常に有り難い御縁をいただいたと思う。蓬茨先生はこの後、毎年本研修会に御出講いただくことになり、確か6回お越しになったと思う。最後は、奥様と同伴で来ていただいた。丁度私は教務所にいてお世話したので覚えている。

我々第1回の伝道講究院に出たものが集まって、「遊歩の会」という学習会ができたのです。そして、第2回も「遊歩の会」が参加メンバーとして受講しました。第3回からは別の参加者で開催されましたが。我々遊歩の会で蓬茨先生の講義録を作ろうということになり、その第1回の講義録が「真宗の教相」、第2回目は「真宗とは」という題で出版しました。当時、まだ20代、30代だったからエネルギーもあったよね。お互い激論を戦わしたこともあったし、参加者の中で、今まで自分のやってきたことは何だったのかという問いも起こってきた。そういうことがとても良い勉強になったと思う。

やがて期を同じくして北海道に「教学研究所」をつくろうという動きが高まり、その結果教区の多額の予算が計上され、昭和48年10月に「北海道教学研究所」が開所されたのです。そして最初、この伝道講究所参加者を対象に研究員が選ばれ、第1期の教学研究所が始まったのです。先にも言いましたように、初代教学研究所所長は仲野良俊先生でした。そして、その教学研究所という所は単に知識を学ぶ学習の場でなくて、北海道教区という中であって一人ひとりが寺を背負い、道を求めて行けるような学びの場所を開いて行こうというものだった。それは正しく同朋会運動の中で温めてきた、当時の教区の先輩諸氏の熱い願いがあって生まれたものだと思う。

まあ、教学研究所の変遷については、以前、教区で発行した～教学研究所20年のあしあと～「学仏道場」の中に縷々述べてある。その中には仲野良俊先生の還暦祝賀会の時の講演録で「存在と歓喜」というのも載せてある。今年40周年を迎えるのだよね。あれからもう20年経つわけだ。今日まで続いて来たということは、北海道教区の学習の場としてとても大事な機関だったということだよ。

まあ、育成員という言葉。どこまでも育成員というのは同朋会運動を支えていく。そういうことに心を傾注していく名前として用いられたのだと思う。推進員は本当に身を以て、僧俗相携え御門徒の中でめざめてもらう。めざめてもらえるような人を生み出していくという願いが、この育成員・推進員の言葉の中に託されていると思う。

—— 御門徒の教化としてはどういった。またそれが教区から組、組から寺院へとどういう広がりを見せたのでしょうか。

流れとしては推進員の発掘が一つの門徒教化の命題だったと思う。御門徒とは不即不離の関係。お寺に帰ってきて御門徒と接するっていうことは、我々否応でも。ところがさっき言うようなもので、こちら側に深いそういう信念があるわけでもない。そうするとやっ

ぱり語ることも中々難しい。むしろ、御門徒という存在はある意味で、僧侶もそこから学ぶということがないよね。それまでは僧侶は教える側、門徒は教えられる側という発想があったのだと思う。そうでないのだと。御門徒から学ぶということ。我々は謙虚にそのことを受けとめて行く、それが教化ということの大きな意味なのだ。そういうことも教えられて。だから僧俗一体の運動体をつくっていかなければならない。そこで同朋会運動の柱に据えたのが、いわゆる「特別伝道」、「真宗本廟奉仕」、「推進員教習」、これらが門徒教化の三本柱。それと同時に育成員の「住職指定奉仕団」があったのだよね。本山へ行って、住職も一緒に寝食を共にする。

—— 住職指定奉仕団？

住職指定奉仕団というのがあった。例えば組で特別伝道が開かれるとすると指定された組の住職さん方が本山行って、そこで同じく奉仕研修をする。だから、門徒の人だけでなく住職も奉仕団として、常に一体となる循環運動だった。そういうことから「特別伝道」「真宗本廟奉仕」「推進員教習」の3つが本山と地方を結び付けていた。

我々の組も昭和40年代ぐらいに、随分各お寺から奉仕団が出て、団体で本山に行ったものだ。教区において特別伝道は、何年頃まで続いたかな。私が教務所におる時、まだやっておったのだから。昭和37年から始めて、昭和50年代に入っても、まだ全20ヶ組が終わっていなかった。確か15組か20組が最後だったと思う。それだけ長い期間で。まあ、なかなか組によってはそういう教化体制がとれないということもあって、難しかったのだけどね。だけど、御門徒の方々は純粹だから。いろいろとやっぱり本山から来られた人に、この際率直に物申したいという人がおったと思う。単刀直入に批判もいろいろあったようだ。

当時、私が一緒に教務所で仕事した大先輩に中田正二駐在さんがおられた。この方はほんとに北海道で骨を埋めたような人。石川県、金沢の松任の人だけど、最後まで北海道に。北海道で亡くなったようなものだな。私も中田駐在にいろんなことを教えてもらったし、一緒に飲みにも行ったものだ。だけど、今の駐在さんの仕事とは全然違う感じがする。これもいろいろ難しいのだけれど、駐在業務っていうのは。私も経験あるけど。駐在は事務屋ではないのだとかいって、事務をせんわけにもいかない。常に駐在業務はプランナーかオルガナイザーかといって。全国駐在会議に行ってもそんな話しばっかりしとった。第一線に出て、教化活動の先頭に立つというのが駐在業務。と思えばプランも作らないで一体何をしているのだということになって。片一方は机ばかり座っている駐在と、外へ出てばかりの駐在と、いろいろ批判もあったものだ。

これは裏話だけど。当時、同朋会運動を提唱した訓覇信雄元宗務総長さんは人事に長けていたようで、本当かどうか直に聞いたわけではないけれど。駐在はそれぞれの教務所で所長のお目付役だと、そう言われた駐在もおったとか。まあ、そのぐらいの意気込みで教

化に専念すれと。「所長は金の勘定ばかりやっとする。けしからん。そういうのはわしの所に言って来い」と。当時訓覇総長さんが言うたとか言わんとか。だから、同朋会運動の願いは常に、多くの人々の中に教えを聞いていただくご縁をつくるか。そういう仕事を駐在はしなさいということだろうな。駐在にとって推進員の発掘は大事な仕事だったのだよ。

今も教区で推進員教習を実施しているけれど。当時の後期教習は、前日、全道各地より上山希望者が札幌教務所に集まって一夜研修を行う。前期教習の日程は一応、一泊二日なのだけど。夕方6時から9時ぐらいまでの3時間程、研修を行って、翌日後期教習に出発するというやり方だった。要は初めて、本山に足を運んでくれるだけでいいのだと。まあそのくらいのおおらかさがあったよね。そこで触れたものに感動して帰ってきたというか。当時の交通は、今の航空機時代じゃないからね。国鉄の列車だからね。私の組も毎年、寺族と門徒が一緒になって後期教習を行っていた。当時一週間ぐらいかけて行ったのだよね。道中が研修だと言って、汽車の中で。いろいろと各お寺の人と交わって日頃の生活を確かめ合っていたのだと思う。当時は生活そのものがゆったりしとったのかな。それほど時間的な束縛受けないでよかったのだろうな。そして家族形態も違っていた。今みたいに核家族じゃない。自分が家を空けても安心しておれる。息子や、子供がちゃんと家を守ってくれる。安心して出掛けられる。今、自分が出ていたら誰もしてくれる者がいない。そんな何日も空けられない。我々農村地帯は特にそうだよな。昔は家の事は若い者にある程度まかせて、自分はどこでも行けたという時代。そういう時代でなくなった。

だから、私の組は当初、そういう願いにふれた人が多かったように思う。これも紹介したいと思っていたのだけれど、5組で作った「同朋通信」という機関紙。ここに第1号から持っているけれど。組内の研修会の案内やら報告やらを記事にして発行しておったのだよ。特に推進員の前期教習や後期教習等。組には良念寺の山本良超住職がおられたからね。あの方は書家であり文筆家だった。北海道教区駐在の2代目ぐらいじゃないかな。山本住職はその牽引役だったように思う。「同朋通信」のイラストを書くのは絵にも書にも長けている彰信寺の竹内順導住職だった。紙面には本廟奉仕の写真を載せたりして、組内に配布したのだよ。当時上山研修に7日間かけて行っている。団費は15万円位、それでも毎年何十人か行っているのだからすごいよね。それだけ熱意があったということかな。



この同朋会運動は推進員という人を発掘することが願いだっただよ。それこそ門徒教化の中で、そういうものに揺り動かされて、我々（推進員）も、この宗門の担い手なのだという意識をもった人も生まれてきたのだよね。ただ問題なのは袈裟、衣、着けている住職に対して批判が生まれる。「あそこの住職はなつとらんと、何もしとらんと」。こうなるのだよね。「うちの寺の住職はなんもそんなこと教えてくれん」と。そうするとそれが今度、問題になってくるのだ。寺の送り出す住職側としてはとんでもないと。研修会に出席させたら、住職批判をしだしたと。本来はそれが有り難い御縁だと受け取れることが一番大事なことなのだけれども、そうはならない。もう二度とそんな研修会に出席させないと、ブレーキがかかるのだよね。そこがまた難しいところなのだ。でも大局的にみると、御門徒の目が開かれたということはどれほど宗門にとって大事なことだったか。それこそ宗門問題。これは大谷派宗門中に、ある意味で本来の宗門とは何かっていうことを御門徒の人まで考える機縁をつくったのだと思う。

宗門は、これまで徳川幕藩体制の「知らしむべからず、寄らしむべし」の体質を温存してきた。だから都合悪いことは言わない、金だけ出せと。こういうものがあつたのではなにか。だけど、そんなことは長続きするはずがない。だから当然、御門徒の目覚めた人は、とんでもないと。そこで摩擦が生じるということがおこる。だけど、そこから行政の面でも正常化に向けて、やっぱり御門徒の声というものを大事にしようという動きがどんどん出てきたように思う。宗門の議会も昭和56年の「宗憲改正」にともない、従来の「門徒評議委員会」が「参議会」になり、「宗議会」と同数の議員となって宗門運営の責任を持つ。行政の中にかつてそんなことはなかった。それはある意味で正常な活動になっていったと言えるのではないだろうか。

だから宗門問題と一口に言うけど、これは同朋会運動がなかったら宗門問題は起きなかったと思うよ。大谷家という存在は、徳川時代の体質をそのままを引きずってきた。いや、大谷家だけでなく1ヶ寺、1ヶ寺の我々の寺の存在も同質のものを持っている。お殿様の世界というものを。お殿様はいつも自分の足下が危ないというか、座を揺り動かされているようなものを抱えている。しかしそのような身分制度とは異なり、ご法主といえども御同朋御同行であると。そういう世界にお立ち下さいということが、同朋会運動の根底の願いにある。

宗門問題の発端になつたのは、「管長職」という職の問題が引き金になつたのだよね。すべて宗門の実権は、この管長という職にあつた。だから管長という職の印鑑一つで宗門の財産が、ある意味でとんでもないことになるわけだ。印鑑一つで。人事面でもこの印鑑一つでどうにでもなる。そういう管長という職責を私していくっていうか、私物化したのだよね。もともと、大谷家という存在は無答責といって、責任は問わないという職。責任ある職にありながら責任を問わないという職。何事があつても責任は問わない。責任が一番重い責任を持つとつたのよ。そういう仕事を無答責という、そういうことの中で大谷家は問題を起すすわけ。手形を乱発したりして、まあ財産にまつわる問題。そういうことが宗

門問題の引き金となって始まるわけね。

それから教学面でもそうだね。能化・所化とって、能化というのは教える立場。所化というのは教えられる立場。ご法主というのはいつも教える立場。教学の判定を有する立場。「あんたの御安心は間違っとる」という。そういう権限を持つような、正に能化の立場だね。それまで大谷家というのは、そういうことを起こさんことを前提にした職責だから。まあ、それが全部宗門問題に絡むわけだね。



ところで、同朋会運動においては、推進員の活動が非常に重要な役割として求められてきた。北海道でも昭和50年代に、推進員の自主的な活動の兆しというものが出てきたように思う。私も教務所におる頃、推進員後期教習を終わってきた人が札幌に集まって、「雪まつり研修」というのをやっていた。藻岩山の青少年研修センターで。その頃教化担当をしていたのが中田正二駐在。上山して帰ってきたら、参加者に今度2月の雪まつり研修で再会しようと言って呼びかける。北海道中に散らばった参加者が集まって、懐かしい集いもたれる。そして、その輪が徐々に広がりを持つようになった。私も知っているけれど、初めの頃の推進員になった方々は、手弁当で教務所に来て、研修会案内を自分らで葉書に手書きし、コピーして出していたのだよね。そういう推進員になられた御門徒の熱意というのはすごかった。あえて名前をいえば、7組の東巖さんや8組の木口敏雄さんという人、今でも覚えていますね。そして、全道にそういう地道な運動が始まって、道央地区の推進員の人々を中心に、各組に組の推進員連絡協議会というものをつくらうという動きが起こってきた。その結果、4地区推進員連絡協議会、組推進員連絡協議会が生まれたのである。さらに、全道推進員連絡協議会（道推協）が出来て、形の上で組織化がなされたのである。ある意味では、自分らの手作りの運動で始まった推進員の連絡協議会だ。これは全国推進員連絡協議会（全推協）もそのような形態だったと思う。いまでも、全推協の「羅網」という機関誌が発行されているよね。それもここにあるけれど、創刊号から取ってある。これは昭和56年（1981年）から始まったり、それは期を一にしるのだよね。

道推協は昭和55年に出来ているから。道央地区推進員連絡協議会から始まって、道東に呼び掛け、道北に、道南と呼び掛けていったように記憶している。これらについては「道央推協20年の歩み」という冊子が作られており、その記録書かれている。

—— 具体的にどのような？

最初に道央地区で第1回同朋大会を開いた。これ私が教務所における時の昭和52年の年。会場は札幌別院で、講師には東昇という京都大学の先生でした。この方は京大で、日本の電子顕微鏡を最初に作った人だと聞いている。鹿児島出身の方です。お母さんがとても念佛者だったようで、そのお母さんの影響を非常に受けたようです。当時京都大学は大谷大学と強い繋がりがあって。以前には、親鸞の教えを聞く京大の先生方や、学生の集まりがあったようです。東先生もそういうメンバーのおひとり。この大会の時も東先生はお母さんの事を思い出しながら語られていたのを覚えている。先生の著作に法蔵館から出ている「力の限界」という本がある。とってもいい本だよね。その東先生を迎えて最初の道央地区の同朋大会が開催されたのです。推進員、自からが呼びかけてやった大会だ。まあ、それが次第に広がりをもつようになった。なんととっても、同朋会運動の背景には推進員の力というものが大きかった。推進員になられた方は、分かって分かってでも本山へ行って感じ取ってきたものが、何か自分の生き方と関係あるのだと言うことを次第に頷けるようになっていったのだと思う。

—— どんどん波及していったという感じなのですね。

そうだね。やっぱり一人ひとりの灯がついて行ったという感じかな。しかし、燃えるように始まった運動も、それが長く今日までくるとだんだん形骸化していく。なんでも長く続くとそうなのだろうね。形だけが残っているという。先ほど「同朋通信」のことで言ったけれど。当時、お互い育成員と推進員の間で問題を共有し合うということが出来たこともいろいろあるわけだね。例えば上山奉仕研修に行ってきた人が、次の上山参加を呼び掛け合うということもあったよね。まあ、それが育成員・推進員の教化活動ではなかったかと思う。要は、核になる人がそこに一人でも二人でも生まれた。寺族にあっても、御門徒にあっても。どこまでも人、人ということがすべてを決するのだと思う。そりゃ、運動の技術論や方法論、それも無視は出来ないけれど、やはり人と人の出会いが大事。その人を揺り動かすような出会い。感動というか、そういうものが次を繋いでいくんだろうね。

教えというのは、単に教理で伝わるのではないのだと思う。親鸞聖人は『教行信証』の教巻の標挙に真実の教・大無量寿経という言葉を取り上げておられる。その教巻に教理は述べられていない。『大無量寿経』の中で、阿難がお釈迦様の「光顔巍巍」としておられるお姿を見て、今日のお釈迦様はいつもと違い、未だかつて見たことがないという問いが述

べられている。教巻はお釈迦様の「五徳現瑞」の姿を述べられておるだけ。ここに釈尊の「出世本懐」が語られているのである。それは人間の深さとか重さ、それに尊さというものを感じ取るお心を表しているのではないだろうか。教えというのはそういうものとして宗祖は受け止められているのだと思う。だから、この同朋会運動もやはり法を通しての人との確かな出遇い。そういう人との出遇いの歴史が「浄土真宗」の教えとして伝えられて来た。『歎異抄』のお言葉で言えば

「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもってむなしかるべからずそうろうか」と。

私の経験で言えば、教務所で駐在をしていた頃、宮城巖先生と一緒に研修会に同行させてもらい、先生と寝食共にしながら、先生は生活の中でこういうことを考えておられるのだなということの色々学んだことを覚えている。何か、そういう人と人の出会いを通して次第に仏法の確かさというものを感じ取れるようになった。

真宗大谷派宗門というのは、先にも記したが清沢満之先生の存在がとても大きいように思う。その先生の周りでは人々が出遇い、集まり、仏道をたずねて行かれたのである。そして、それはいつも仏道の根底に自己という課題を外さなかった。先生の言葉に次のような言葉がある。

「況んや大谷派本願寺は、余輩のよつてもって自己の安心を求め、よつてもって同胞の安心を求め、よつてもって世界人類の安心を求めんと期する所の源泉なるにおいてをや。」

いふなれば、先生のその自己というのは世界人類を内包する言葉である。だから同朋会運動の宣言文にも、「世界人類に開かんがための運動」という事が出てくるわけだ。運動の背景はここから来ている。さらに遡れば、蓮如上人は「一宗の繁盛」ということを仰っておられる。そして、それは一人の信というところに帰結するのだと。やっぱり信心という事が大事なのだと。そういうことを受けて清沢先生は又、

「夫れ此の如く、巍々たる六条の両堂、既に大谷派と為すに足らず、地方一万の堂宇、既に大谷派と為すに足らず、三万の僧侶、百万の門徒、亦た直ちに大谷派と為すに足らずとせば、大谷派なるものは抑々何の処に存するか。曰く大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所に在り。豈に人員の多寡なるを問わんや。豈に堂宇の有無を問わんや。」

果たして、我々は大谷派宗門というものをどこで受けとめているか。ややもすると、ただ宗派というところに陥ってしまうけど。しかし、宗門は単なる形の世界ではない。我々を本当のことに出会わしてくださる精神的世界である。宗門とは、そういう出会いを生み出す場所なのだと思う。清沢先生は「大谷派なる宗教的精神」と。そこがやっぱり、僕は一番有り難いところだと思う。あえてそこに「大谷派なる」という言葉。清沢先生は大谷派にあって大変な宗門改革運動をなさって挫折された方である。しかし、そういう大谷派宗門に身を置きながら恩徳を感じ、そして喜んでおられる。それは大谷派の伝統から聞き取った宗教的精神というものではなかったのかと思う。本当の意味で宗祖親鸞聖人の心というものに、深く頷かれたのだらうと思うね。だから、百万の門徒あろうと、立派な建物があろうと、そんなのは問題でない。どこまでも自己の安心、すなわち信心ということを常に課題にされたのが清沢先生である。その精神を受け継いだのが同朋会運動といえるのでないかな。ただ、言い方を間違えると単なる自己主張になり、己の驕りになってしまう。深く内心に蓄えるものがあるか、ないかということだらう。自己の学びがないと、同朋会運動も単なる政治運動になってしまう。何か、そういうことを感じるね。

—— 現在、そしてこれからの寺院、また寺族の担う役割について、思うところを述べていただければと思います。

寺院の役割というのは言うまでもなく、寺院におけるものがまず法座の前に座ること。これが一番大事なことでないのかな。寺の住職が、法座の前に座らんというのは、勤めを放棄しとるのだと思うよ。自分が聴聞させてもらう。それ以上の門徒教化はないと思うな、自分の体験からいうと。住職も、坊守も聴聞しないで、人に聞きなさいというのは、それはまことに不遜なことだと思う。一言でいえば、そういう生活姿勢が寺院の役割の第一歩。しかし、それが中々出来ないのだよね。

—— 仏道を歩むということについて氏が大切にしている思いがございましたら、お聞かせ願いたいのですが。

僕はね、いつも忘れんのが、教研時代に仲野先生から言われた言葉。ちょっと言葉は乱暴だけど。

「お前たち、はげ頭が、毛生え薬を売っているような説教をしとったらあかんのや。」
解る？「この薬は毛が生えますよと言って、一生懸命、自分の頭の事忘れて売り込んでも、誰も買わんと。」丁寧なこと言えば、「頭に髪の毛のない人が、これは髪の毛が生える薬だよと、一生懸命売っても、それを聞いているものは、誰もそのことを信用しない」と。もしかすると、あんた方も寺で似たようなことをやってないかと。まあ、そういうことだね。

—— そういう面では、自信を失っている。自信を持って話して行けない。というような問題を抱えている。

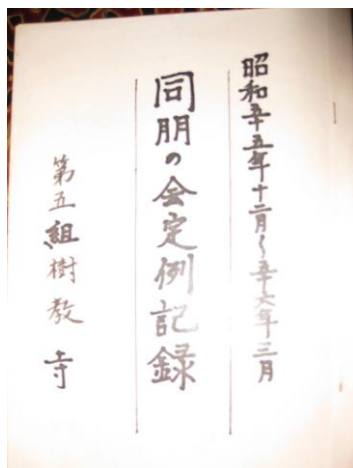
まあ、その例えは自分の中に、戒めの言葉として聞かなきゃならんのだろうね。要は、自分のことを忘れて語ることなかれということなのかな。本当に自分の求めておる世界を語る。いつも自分は教えられ、育てられているという精神を失わないで語る。それ以外に仏道はないことを仲野先生は仰ったのだと思う。

親鸞聖人も、曇鸞大師のお言葉を引用して「未証浄心の菩薩」と仰っておられる。「未証」、人間、生涯、「いまださとらず」ということ。俺はさとったのだと言ったら、それは危ない。常にいまださとらず。だから求めるということがあるのだよね。求道というのは、「未証浄心の菩薩」の自覚だと言える。俺は分かっているという所に有り難いものは何もない。信心をいただくというのは、そこに何も聞いてこなかったなとか。自分の中に、ほんとに恥ずかしいことだったなとか。そういう心の芽生え、正に呼び覚まされた心をいうのだと思う。聞いてこなかったことの慙愧というか。仏法の深さはそういうところにある。「恩を知る」というのは、「恩知らずの身である」ということを知ること。恩が分かったのではない。恩を知らなかったということの領きが深い恩を知ることである。俺は恩を知っている、分かっているという時は、その恩はそこで留まってしまう。「如来大悲の恩徳は」というのは、いつも、そこに照らされて恩を知らなかったという、領きの中の世界だろうね。それが求めるということとひとつだと。一生涯、そういう世界に立たせてもらう。それが仏道。道というものを我々がいただける。出会いの尊さというのは、そういうところにあると思うな。振り返ると、あの時、あの先生のお話しが、自分にこういうことを気づかせてもらったなとか。そういう喜びだよ。分かったことにはせんということかな。そんなことを私は思う。

だからこういう教団、宗門っていうのは、師と友をいただくということだろうな。先生と法友というか。やっぱり、一緒に聞いていける友をいただく。それは広い意味では僧伽ということだろうな。このことは、安田理深先生がずうっと思念しておられたことだと聞くけど。僧伽ということ。安田先生のもとには多くの教えを請う人々が集まり、「相応学舎」という私塾が開かれていた。仲野先生はいつも一番前の席に座り、ノートをとっておられたと聞く。仲野先生の指定席があったようだ。当時同朋会運動発足当初、安田先生の影響を受けていた人がとても多いのだよね。まあ今では名前や本でしか知らない先生が多くなったけど。だけどやっぱり、そのような先生がおられたということが、なんか大谷派宗門にご縁をいただいたことを有難く思うよね。色々だね。一つはやっぱりそうだな。それまでのお寺が、同朋会運動が起きたことによって今までの眠りから覚めたというところもあったと思うね。同朋会運動を進めていく中で、当然その運動に対する批判も起こって来た。しかし、それはむしろ宗門の中に自浄作用がはたらいたということではなかったかと思う。正に運動というのは批判が常に伴うものだから。

—— 樹教寺の御門徒さんとの関わりの中で、変化というものを感じたことは？

それはねえ。私の寺の事でいえば、長いこと樹教寺仏教青年団というものがあったのだよ。略して仏青と言っていた。しかし、だんだん年齢は高くなって、青年団といっても50代、60代の年を越え、ならば樹教寺同朋会にしようということで昭和50年から始まった。通年で夏期は夜、冬期は昼を原則として行うこととした。



当時、教区には同朋の会定例ということと併せて季節定例を含む青壮年定例というものもあった。私のところにも冬期間、御講師を派遣してもらった。車座になって門徒との対話も結構弾んだのだよ。とくに身近な法事や葬式の話が語られたものだ。今も同朋会は存続しており、「報恩講」や「花まつり」の行事も勤め、大事な門徒交流の場になっている。お寺の中で婦人会、同朋会と色々名称は違うけれど、来る人は大体一緒の対象になってしまう。それでもお寺に足を運んでくれることは有難いことだと思う。同朋会の報恩講を勤める時は、住職も坊守も志納を出して、みんなで勤める。御同朋御同行の精神でね。それも意識としては大事なことだと思う。

—— それぞれお寺の同朋の会に対しての定例？

当時、教務所には同朋の会の講師要請があり、教区駐在がその担当だった。一つの線を組み、駐在自身、若しくは駐在が教区内講師を選定し、派遣していた。それともう一つは、先ほども触れたけれど教区定例線の中で冬期間だけの定例線もあった。それで同朋の会定例とはいわないで、両方を含めて確か「青壮年定例」と呼んだのだよ。だから青壮年定例線には季節定例と同朋の会定例があった。昭和40年・50年代ぐらいの北海真宗を見ると、青壮年定例線というのが出ていると思う。この教区の青壮年定例は、当時青年僧侶の学習の場という意味もあって、駐在さんから我々若いものに勉強のつもりで話して来

いと言われたものだ。特に座談会というものに重きを置いていたのだよね。夜のお座もあったしね。道東地区には夕方、夜6時からという会所もあった。私も何回か行ったことある。本当に人が人に語るということの難しさを実体験した感じだね。

ところで、訓覇信雄元宗務総長さんをお招きし、教区の研修会が藻岩の研修センターで開かれたことがある。たまたま座談会の時に、訓覇さんの書かれたメモ書きを見てもなく見たのだよね。それが未だに頭に残っている言葉として、「仏道は自信の他に教人信なしということ」が書かれてあった。これは清沢満之先生の仰っておられる言葉の中にも、「自信教人信の誠をつくす」というのがある。「自信教人信」という言葉は、宗祖も大事になっておられる。『教行信証』の中に善導大師の『往生礼讃』を引いて、「自信教人信 難中転更難…」、「自ら信じ人を教えて信ぜしむ、難きが中に転た更難し」と。正に教化の課題は、この言葉に尽くされているように思う。自ら信じ、人に教えて信じさせることは、難しい中にもなお難しいと仰るのである。我々は人を教化するといって、何か人に向かって教えを聞かそうとか、分かってもらおうとか、そういうふうに努力するけれど、自分自身というものに領けないものは他人も領くことはない。これが大前提だ。「自信」の他に「教人信」と言うものはないのだということである。言うなれば、仏道というのはその一点において、人の上に開いていく力があるということかな。自分に領いたものだけが人に伝わるとのこと。これは自信教人信の誠をつくすということの心として大事なことのように思う。同朋会運動というのは、本当に生きた人間を生み出す、自分がほんとに喜んだことは、人も喜んでもらえるということ。だから学びが大事ということなのだろうな。人に会う。人から教えていただく。育ててもらふ、常に。その具体的な事と言えば、自らがまず法座の席に着き、聴聞するということではないかと思う。そんなことを思い起こしながら、語らせてもらいました。

—— 長時間にわたり、ありがとうございました。

